



地域の活性化をめざした オラが町の山村留学

小川 文夫（おがわ ふみお）

北海道北オホーツクの大自然で学ぶ会会長（酪農家）

1 学校は地域のコミュニティ

「私たちは神奈川県から移住してきた〇〇です」「私は子ども2人を連れて親子留学した△△です。よろしくお願いします」。

今年も神奈川県や滋賀県などから家族移住する定住留学や親子留学で山村留学生がやってきて、農作業などを終えた地域の人たちが集まって歓迎会が開かれたのです。

今、農村地帯は高齢化や後継者難で酪農をやめていく人が多く、集落形成が困難になっている地域もあります。しかし、私たちの集落は一步一步ではありますが、人口の減少に歯止めがかかっています。

それは、『山村留学』という地域づくりを始めたのがきっかけでした。現在、集落人口の35パーセントが留学家

族で占められています。

このような私たちの町、浜頓別町は、最北端の稚内市をオホーツク海沿いに90キロ南下したところに位置し、第一次産業を中心とした人口4,600余名の小さな町です。豊かな大自然に恵まれ、ラムサール条約に指定されているクッチャロ湖には2万羽を超すコハクチョウがシベリアからやってきます。また、東洋のクオロンダイクといわれたウソタンナイ砂金採掘公園があります。

その町の中心より7キロ程山間に入ったところに、山村留学を推進する私たちの集落、豊寒別地区があります。9戸の酪農家を中心に37世帯120名程が暮らす小さな集落です。

私たちの集落は、明治35年に開拓の鉤がおろされ、熊の恐怖におびえながら開墾に精を出した先人の労苦によって、今日の生活基盤が築かれ、かつて

は50戸の酪農家で賑わっていた時期もありましたが、時代の流れか便利な生活や仕事を求めて地域を出て行く人が相次ぎ今日に至っています。

そのような中、集落の中心で地域住民のコミュニティの場として大きな役割を果たしてきたのが、88年の歴史を持つ豊寒別小学校です。しかし、児童数は昭和34年の103名を最高に、年々減り続け、平成7年には13名にまで減ってしまいました。

地域住民に元気と活力を与えてくれていた学校への期待や学校行事への地域住民の参加、また、子どものいないにかかわらず全住民がPTA会員となり、地域全体で子どもの成長を見守ってきたのも、開校以来の歴史だっただけに、発展を願わずにはいられないのです。

学校行事に多くの大人たちも参加することによって、交流が生まれ地域住民の結束力を高めてきたのです。

農繁期の始まる六月には、「まず運動会を終わらせよう」と地域をあげての大運動会を楽しみ、また、先生方の転入転出での歓送迎会では、みんなで酒を酌み交わし別れや出会いを味わい、総出で荷の積み降ろしを手伝い、初め

て赴任する先生は人の多さに驚きの声を上げます。88年にわたる歴史の中で、学校は子どもの成長のためだけではなく、地域の人々の交流を通した人づくりや地域づくりの拠点になっているのです。

2 学校を守ろう！危険校舎から校舎新築へ

農村地帯の学校は、「コミュニティセンターの役割を果たしている」とよく言われていますが、学校と地域が連携して、子どもの成長を見守ってあげることが大切な事だと思います。

学校を地域のシンボルと位置づけ、地域の産業を取り入れた教育を進めることは、次代を担う子どもたちにとって重要であり、どんなに子どもが減っても、やがては、この子どもたちは地域に根ざしてくれるという大きな期待を地域全体が持っているのです。

そのような思いから、平成5年に、建設以来20数年がたち危険校舎に指定されて久しい小学校を、「新しい校舎に建て替えてもらおう」という声もち上がりました。

この子どもたちにも近代的校舎で学んでほしいという意見は、小学生のい

ない家庭の大人からの強い要望でもありました。地域のリーダーは、話し合いを始めるために、自治会、女性部、PTAの各組織の代表からなる「校舎の全面改装を促進する期成会」を設立し、行政に対して要請行動を起こすことになっていったのです。

しかし、話し合いには紆余曲折がありました。「13人しかいない子どものために、学校の建て替えは財政のムダではないか」「廃校にして大きな学校へ行くことこそが、子どものためになるのではないか」。

さらには「年々児童数が減少する見通しの中で、なぜ今校舎の全面改築なのか。そんなことを言っても、行政を納得させるのは困難だ」などの率直な意見が出されました。

ところが、多くの時間をかけて議論を重ねるうちに、「地元を去った子どものいる方に、Uターンを呼びかけようか」とか、「山村留学をやろう」「特認校の指定を受けて、子どもたちを集めよう」など、学校を守ろうとする立場に立った意見に変わっていきました。

その中から山村留学制度の導入を決め、行政に対して改築のための説得力のある要請行動を進めることにしたの

です。町長をはじめ教育委員会や議会関係者への要請が続けられた結果、着工年度も明らかになっていきました。

そして、地域にふさわしい学校にするために、校舎の視察研修などを重ね、間取りや広さなど住民の意見が反映された設計になったのです。

校庭の広さを十分に確保するために、用地5,000平方メートルを寄付する人も出るなど、熱のこもったものとなりました。



豊寒別小学校の全景

2 おいでよ！大自然の中に！ 宅地200坪を無償提供

一方、校舎の全面改築の要請行動と同時進行で、山村留学制度の立ち上げについても活発な議論を進めていきました。私たちにとっては未経験であり、半信半疑の思いはスタートの時から

持っていましたが、そうした不安は、回を重ねた議論を通して、払拭することが出来たのです。

知恵を絞り草案を作る議論は、何日続いたことでしょうか。私たちは、この制度の基本を「学校を守るために子どもを集めるのではなく、地域の中に沢山の人がいて、その中に子どもたちがいる。だから学校が必要なんだ」という認識で一致し、移住方式を決めたのです。

「俺たちには金はないけど、土地はたくさんある。移住して家を建てる人に、宅地をあげよう」とのある酪農家の提案は、議論が煮詰まっていたときの甲高い声となって、静まりかえった中に響き渡って聞こえました。

「そうだ！それでいこう。名付けて定住留学だ」。話はトントン拍子に進みました。

『訪れませんか！北の大地へ！宅地200坪無償提供』。キャッチフレーズは出来上がりました。

定住留学だけではなく、どちらかの親と子どもが留学する親子留学と、子どもだけが留学して酪農家にホームステイする里親留学の三本柱の山村留学制度にしたのです。

そして、ほとんどの世帯が参加して山村留学の推進母体である「北海道北オホーツクの大自然で学ぶ会」を組織化し、関係機関の出席のもとで発足総会を行い、準備期間を終えた三ヶ月後に東京・上野駅での街頭宣伝をはじめ、各マスコミに向けた宣伝活動を行ったのです。

『山村留学で大自然と暖かい輪の中へ』『土地付き住宅、夢じゃない』等の見出しを付けた新聞・雑誌報道によって問い合わせが相次ぎましたが、冷ややかな意見も周りから寄せられました。「こんな田舎に誰も来ないよ」とか、「地域住民だけの力では無理だろう」「課題の方が多い」等々。

指摘された意見はみんなの課題として率直に受け止め、討議を通して解決の道を探りました。

募集を開始して一ヶ月あまりが過ぎ、第1号の里親留学生を迎え入れたのは、平成7年10月1日でした。残り少ない小学校生活を、大自然の中で暮らしたいとの願いをもって、東京から里親留学を希望しやってきた5年生くん。彼は一年五ヶ月間を最北の地で過し、小学校の課程を修了したのです。

その後も、親子留学を迎えるなど、

山村留学制度は順調に定着していきました。

家族を迎えるための住宅の確保や、里親を引き受けて頂く家族の募集等、受け入れ体制は決して万全のものではありませんでした。しかし、地域の熱意や悩みは行政にしっかりと伝わり、古い住宅の整備や留学生用の住宅建設など、全面的なバックアップを受けることが出来ました。行政の支援は、私たちの取り組みをいっそう励ますものとなったのです。

こうした中、私たちがもっとも重視してきた定住留学の第1号を迎え入れたのは、会が発足して一年後の平成8年のことでした。待ちに待った定住留学ということで歓迎セレモニーや仕事探しに東奔西走し、地元の関係会社などから絶大なご協力を頂きました。

定住者の生活基盤でもある仕事を探すことは、なんといっても最大の課題です。都市での営業マンやコンピュータ関係の仕事を辞め転職し、四年後には自らの住宅を建設しなければならいのですから、定住留学する親たちの強い意志が必要とされているのです。それだけに、受け入れる私たちの責務も重要になってきます。

そんな困難を乗り切って、これまで6家族の定住留学を迎え入れ、すでに4家族が住宅建設を完了し、地域の中にガッチリと根を張りめぐらせています。

転入者など、先生以外に受け入れたことはなかっただけに、都市からの移住によって地域のなかに、新しい住宅が建ち並ぶことは、画期的な出来事として歓迎されたと同時に、私たちにとっても誇りでありました。

3 子牛をプレゼント。子どもたちは生命の誕生に感激して

留学された方々に「来て良かった」と言ってもらえる環境を作ることは、とても大切なことです。

山村留学の取り組みの一つに、『子牛のオーナー制度』があります。子どもたちに地域の産業を理解してもらうことと同時に、生きる喜び、命の大切さを知ってもらおうと、留学家族に対して、生後間もない子牛一頭を無償でプレゼントしオーナーになってもらい、休日を利用して飼育管理していただいている酪農家を訪問し、成長過程の観察を定期的に行っていただいています。



子牛と触れ合う子どもたち

そのほかにも、自然とのふれあいを肌で感じ取っていただくために記念植樹を行う留学の森づくり等々。

また、日常生活の中でも、さまざまな体験があります。

ある子どもは、乳牛の分娩の様子を見ていて、親が子供を産むときの大変さや、生命の誕生の瞬間を目の当たりにして、感激したと言い、また、ある子どもは、自分たちが日頃触れあっていた牛が、廃用となって売られていく姿に涙をこぼし、やがては処分されることを思い、悲しみにふけていたといいます。誕生の喜びと別れの悲しみを、身をもって体験しているのです。

さらには、3.5キロある通学路の道端に咲く草花や昆虫と対話しながら登下校し、時には野生のキタキツネやシカと遭遇することもあり、白銀の

世界を独り占めしたように寝転がりを繰り返しながら歩く姿を見たお母さんは、「容易にものが手に入る時代に、こんなに贅沢な環境は、意識して求めなければ得られません」と顔をほころばせます。そして、「彼らのこれからの人生で、越えるのに難儀する山があったならば、そのときに使える大きな財産として蓄えておきたい」と。

じゅうたんを敷き詰めたような緑の大地がどこまでも続く真ん中を走る広い道路を、下校のベルが鳴ると同時に家路に向かう子どもたち。

集落が、繁華街に変わる一瞬です。歩道を歩く人の姿を、このとき以外はめったに見ることはありません。遠くから聞こえてくる子どもたちの声を耳にすると、「瞬間ではあるが、このとき地域は生きているとを感じるのだ」と言う、道沿いに住む A さん。

地域の最大の行事でもあるお祭り。人気があるのは『子ども御輿』。この御輿の移動は車で行きます。左右山々に囲まれた静かな牧場が、最高の賑わいをみせる瞬間（とき）です。やってきた御輿に向かって、「子どもがいることは、素晴らしい」と言います。

運動会や学芸会を見ている大人たち

は、「子どもの競技や演技は、実に楽しい」と口をそろえます。14人の全校児童が舞台上上がったとき、「やっぱり子どもは、地元だけの2人よりは多い方が良いね」とBさん。

離農した跡の牛舎や住宅は、人々に寂しさを感じさせます。しかし、校庭から聞こえる子どもたちの歓声は、生き生きした風となって、集落全体に吹きつけています。まさしく、学校は地域を元気づけているようです。

4 子どもは新しい地域づくりの原動力

しかし、私たちの取り組みは決して慶びの日ばかりではありませんでした。

生活環境の変化から留学家族の苦悩がおもてにでて、そのことが職場での人間関係を悪化させ、転出を余儀なくされた家族や、子どもがどうしてもなじまないと行って永住をあきらめた家族もあり、地域を離れるときは共に涙を流したこともありました。

校舎の全面改築を求める運動の中から生まれた山村留学に取り組んで十年目。小学校5年生のときに、第1号の留学生として里親留学した、小倉くんは今年20歳。

この10年間に延べ、140名の子どもたちを受け入れ、全国の30世帯を超える家族の皆さんとの交流を深めてきました。昨年の9月には留学生だった多くの方々をむかえて、「山村留学10周年記念同窓会」を行いました。

また、私たちの取り組みは都市の子どもたちとの交流にも発展していきました。留学生の募集のため、東京や大阪に出かけたときに小学校を訪問し、「酪農の出前授業」を行う先生役を努めています。

北海道の牧場の話を聞けるとあって、子どもたちの目は輝いてみえます。牛の風船を使って、牛の乳房が四つあることや子どもを生まないとお乳を出さない話にため息が漏れます。

多くの質問や沢山の感想が寄せられます。また、ペットボトルを使っの簡単なバター作りにうなずく若いお母さん。

やがてこの子たちが、私どもの地域を訪問してくれることに期待しています。

山村留学の取り組みは、私たちに多くの教訓を与えてくれました。

第一に、自分たちの住んでいる地域の良さを、改めて感じ取れたことです。



東京の小学校での出前授業

大自然に囲まれたこの地こそが、多くの人々の求めているところだということ。

第二に、全国からの新しい人々との出会いによって、子どもも大人も生活に変化をもたらし、そのことが新しいエネルギーとなって表れることです。

第三に、地域には子どもたちの成長にとって参考になる、生きた教材や自然がたくさんあるということです。あるお母さんは、子どもと一緒に牧場で牛を見ていたときに、肉を食べることによって失われる一つの命を例に、「食と肉と命の関係」を語ったといいます。

社会や教育現場で起こる、目を覆いたくなるような事件。こんなときだからこそ、必要な会話なのかもしれません。まさに、牧場は第二の教室といっ

ても過言ではないでしょう。

第四に、人々が住み子どもたちがたくさんいることは、新しい地域づくりの原動力になるということです。

地域は学校を創り、学校は地域に活性化の風を送り込んでいます。

オホーツクの潮風を受け、毅然とそびえ立つ学校は子どもたちの学び舎だけにとどまらず、大人たちの人間づくりにも大きく貢献しているのです。

今、学校の灯は守られ、学校の維持発展によって地域は息づいています。広大な緑の大地の中で、のんびりと草を食む牛の群れの中にこだましていく子どもたちの声は、本当の意味でも『地域活性化の声』なのかもしれません。